[上から]緑黒釉掛分皿 因幡牛ノ戸 1931年頃／流描皿 河井寛次郎 京都 1927-28年頃／藍鉄絵紅茶器 濱田庄司 栃木 1935年頃　いずれも日本民藝館蔵　Photo: Yuki Ogawa

観覧料　一般：1,700円(1,500円)　高校・大学生：1,300円(1,000円)　中学生以下：無料

●カッコ内は20名以上の団体料金。20名以上の団体鑑賞をご希望の場合、大阪中之島美術館公式ホームページから団体受付フォームにてお問い合わせください。●学校団体の場合はご来場の4週間前までに大阪中之島美術館公式ホームページの学校団体見学のご案内からお申込みください。●災害などにより臨時で休館となる場合があります。●中学生以下は無料。●障がい者手帳などをお持ちの方(介護者1名を含む)は当日料金の半額(要証明)。●一般以外の料金で観覧される方は証明できるものを当日ご提示ください。●本展は、大阪市内在住の65歳以上の方も一般料金が必要です。●展示室内が混雑した場合は、入場を制限する場合があります。●詳細は展覧会公式サイトで順次お知らせします。

チケットの主な販売場所

大阪中之島美術館公式ホームページ、ローソンチケット(Lコード：59222)、ローソンおよびミニストップ各店舗

相互割引

本展観覧券(半券可)のご提示で、5階で開催される「Parallel Lives 平行人生 ―新宮晋＋レンゾ・ピアノ展」(2023年7月13日(木)－9月14日(木))の当日券を**200円引き**でご購入いただけます。1枚につき1名様有効。チケットご購入後の割引および他の割引との併用は不可。

企画チケット ※ローソンチケットでのみ販売

オリジナルグッズセットチケット

宮入圭太 本展オリジナルアート サコッシュ

今、注目の染色家／アーティスト・宮入圭太さんの描きおろし作品があしらわれたサコッシュ(斜め掛けの小型バッグ)と、本展観覧券1枚がセットになったお得なチケットです。

販売価格：3,200円(税込)　**数量限定**

サイズ(約)：本体/横170×縦225mm　持ち手/幅10×長さ1150mm
素材・色：キャンバス、生成

本チケット限定デザイン！

●画像はイメージです。実際のデザインは若干異なる場合があります。●チケット購入時に発券されるグッズ引換券を、本展会場特設ショップ(4階)にてサコッシュとお引き換えください(会期中のみ有効)。発送には対応しておりません。●セットのサコッシュの会場販売はありません。同サイズで別デザインのサコッシュを1,800円(税込)で会場販売予定です。

ワークショップセットチケット

ワークショップ「丹波布にふれて、つくろう」への参加と本展観覧券のセット券です。

兵庫県丹波地方で作られ、一度は衰退しながらも柳宗悦によってその美を見いだされた丹波布。作り手のお話を聞き、手紡ぎならではの手触りや草木染めの色合いを楽しみながら、小物をつくってみませんか。

講師：イラズムス千尋(丹波布技術認定者)

A.コースター作り：3,000円(税込)
B.ミニポーチ作り：3,500円(税込)

コースター
7月22日(土) ①13:00－ ②15:00－(各回とも約1時間・定員20名)
ミニポーチ
8月20日(日) ①12:00－ ②14:30－(各回とも約1時間半・定員20名)
会場：いずれも大阪中之島美術館 1階ワークショップルーム
持ち物：裁縫道具(縫い針、はさみ)
●観覧券はワークショップ当日にご覧になれない場合、別の観覧日にご利用いただけます。●定員に達し次第、販売終了。詳細は展覧会公式サイトをご覧ください。

○京阪：中之島線「渡辺橋駅」(2番出口)より南西へ徒歩約5分／「淀屋橋駅」(7番出口)より土佐堀川を越え西へ徒歩約15分○Osaka Metro：四つ橋線「肥後橋駅」(4番出口)より西へ徒歩約10分／御堂筋線「淀屋橋駅」(7番出口)より土佐堀川を越え西へ徒歩約15分○JR大阪環状線「福島駅」・東西線「新福島駅」(2番出口)より南へ徒歩約10分○阪神「福島駅」より南へ徒歩約10分○大阪シティバス「JR大阪駅前」より53号・75号系統で「田蓑橋」下車、南西へ徒歩約2分○美術館には有料駐車場があります(割引サービスはありません)※詳細は美術館公式ホームページをご覧ください

大阪中之島美術館
NAKANOSHIMA MUSEUM OF ART, OSAKA
〒530-0005 大阪市北区中之島 4-3-1
お問合せ
TEL 06-4301-7285 | 大阪市総合コールセンター・年中無休　8時～21時
https://nakka-art.jp

民藝 MINGEI

美は暮らしのなかにある

MINGEI
The Beauty of
Everyday Things

2023
7/8 sat. — 9/18 祝 mon.

[開場時間] 10:00－17:00
(入場は16:30まで)
[休館日] 月曜日
(ただし7/17(月・祝)および
9/18(月・祝)は開館)
[会場] 大阪中之島美術館 4F展示室

[主催] 大阪中之島美術館、朝日新聞社、東映
[協賛] 凸版印刷
[特別協力] 日本民藝館
[協力] 静岡市立芹沢銈介美術館、カトーレック

大阪中之島美術館
NAKANOSHIMA
MUSEUM OF ART, OSAKA

上：スリップウェア鶏文鉢 イギリス 18世紀後半／
下：竹行李 陸中鳥越 1930年代、刺子足袋 羽前庄内 1940年頃
いずれも日本民藝館蔵　Photo: Yuki Ogawa

[展覧会公式サイト] https://mingei-kurashi.exhibit.jp/

[展覧会公式SNS] @mingeiten @mingeiten

約100年前に思想家・柳宗悦が説いた民衆的工藝、「民藝」。日々の生活のなかにある美を慈しみ、素材や作り手に思いを寄せる、この「民藝」のコンセプトはいま改めて必要とされ、私たちの暮らしに身近なものとなりつつあります。本展では、民藝について「衣・食・住」をテーマにひも解き、暮らしで用いられてきた美しい民藝の品々約150件を展示します。また、いまに続く民藝の産地を訪ね、そこで働く作り手と、受け継がれている手仕事も紹介します。さらに、昨夏までセレクトショップ BEAMS のディレクターとして長く活躍し、現在の民藝ブームに大きな役割を果たしてきたテリー・エリス／北村恵子（MOGI Folk Art ディレクター）による、現代のライフスタイルと民藝を融合したインスタレーションも見どころのひとつです。

第Ⅰ章：1941生活展
――柳宗悦によるライフスタイル提案

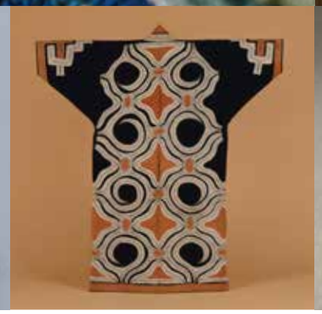
1941（昭和16）年、柳宗悦は自身が設立した日本民藝館（東京・目黒）で「生活展」を展開。民藝の品々で室内を装飾し、いまでいうテーブルコーディネートを展示しました。暮らしのなかで民藝を活かす手法を提示した、モデルルームのような展示は当時珍しく、画期的でした。第Ⅰ章では実際に出品された作品を中心に、「生活展」の再現を試みて、柳が説いた暮らしの美を紹介します。

右：緑釉水注 イギリス 14世紀 日本民藝館蔵
左：日本民藝館「生活展」会場写真 1941年

第Ⅱ章：暮らしのなかの民藝――美しいデザイン

柳宗悦は、陶磁、染織、木工などあらゆる工芸品のほか、絵画や家具調度など多岐にわたる手仕事の美を、日本のみならず、朝鮮半島、中国、欧米などの各国に訪ね、集めました。時代も古くは縄文時代から、柳らが民藝運動を活発化させた昭和にいたるまでと幅広く、とりわけ同時代の、国内各地で作られた日常用品に着目し、それらを積極的に紹介しました。第Ⅱ章では民藝の品々を「衣・食・住」に分類し、それぞれに民藝美を見出した柳の視点をひも解きます。

柳が説いた生活のなかの美、民藝とは何か、そのひろがりと今、そしてこれからを展望する展覧会です。



上：裂織丹前（部分） 越前 江戸〜明治時代 19世紀 日本民藝館蔵＊
下：［左から］駒散し文様羽織 江戸時代 19世紀 日本民藝館蔵／紬ショール 青田五良 京都 1930年頃 個人蔵＊／木綿切伏衣（カパリミプ） 北海道アイヌ 19世紀 静岡市立芹沢銈介美術館蔵

上：スリップウェア角皿 イギリス 18世紀後半-19世紀後半 日本民藝館蔵＊
下：［左から］染付羊歯文湯呑 肥前有田 江戸時代 18-19世紀 日本民藝館蔵／塗分盆 江戸時代 18世紀 日本民藝館蔵／網袋（鶏卵入れ） 朝鮮半島 20世紀初頭 日本民藝館蔵

上：桐文行燈 江戸時代後期 個人蔵＊
下：［左から］芯切鋏 京都 1920年代後半-1930年代前半 日本民藝館蔵／（左上から時計回りに）手箒 仙台郡山 1939年頃 日本民藝館蔵、鹿沼箒 下野鹿沼 1939年頃 日本民藝館蔵、手箒 信州 1939年頃 日本民藝館蔵／円座 朝鮮半島 1930年代 日本民藝館蔵／椅子 オーストリア 19世紀初頭 静岡市立芹沢銈介美術館蔵

＊はPhoto: Yuki Ogawa

第Ⅲ章：ひろがる民藝――これまでとこれから

柳宗悦の没後も民藝運動は広がりを見せました。濱田庄司、芹沢銈介、外村吉之介が1972（昭和47）年に刊行した書籍『世界の民芸』では、欧州各国、南米、アフリカなど世界各国の品々を紹介。各地の気候風土、生活に育まれたプリミティブなデザインは民藝の新たな扉を開きました。

一方、民藝運動により注目を集めた日本各地の工芸の産地でも、伝統を受け継いだ新たな製品、職人たちが誕生しています。本展では国内5つの産地から、これまでと現在作られている民藝の品々や、そこで働く人々の“いま”を紹介します。

そして、本章最後では、現在の民藝ブームの先駆者ともいえるテリー・エリス／北村恵子（MOGI Folk Art ディレクター）の愛蔵品や、世界各地で見つけたフォークアートが“いま”の暮らしに融合した「これからの民藝スタイル」を、インスタレーション展示で提案します。

［左から］濱田庄司、芹沢銈介、外村吉之介『世界の民芸』朝日新聞社 1972年 個人蔵＊／人形 フニン県ワンカヨ（ペルー） 20世紀後半 静岡市立芹沢銈介美術館蔵／靴下 アゼルバイジャン地方（イラン） 20世紀後半 静岡市立芹沢銈介美術館蔵

工芸の各産地の制作風景
［左から］
倉敷ガラス（岡山）＊／
鳥越竹細工（岩手）＊／
小鹿田焼（大分）
写真：濱田 琢司

本展特設ショップもお楽しみに！

トークイベント：「MOGI Folk Art ディレクターに聞く、豊かな暮らしのつくり方」

現代の暮らしやファッションにも溶け込む民藝の新たな価値や楽しみ方を、各地の作り手たちに寄り添いながら生み出し、伝えてきたテリー・エリスと北村恵子。民藝を手がかりとしたMOGI流豊かな暮らしのつくり方について、お話を伺います。

日時：2023年7月8日（土） 14：00〜15：30
会場：大阪中之島美術館 1階ホール　定員150名
参加無料（要展覧会チケット）・事前申込制　※申し込み方法およびその他イベントは決定次第、大阪中之島美術館公式ホームページにてお知らせします。

登壇者：**テリー・エリス／北村恵子**（MOGI Folk Art ディレクター）
聞き手：**北廣麻貴**（大阪中之島美術館学芸員）

MOGI Folk Art　東京・高円寺でMOGI Folk Artを主宰するテリー・エリスと北村恵子は、セレクトショップBEAMSのバイヤーとして活躍していた1990年代から、民藝運動とも関わりの深い日本の手工芸品を、服飾や北欧インテリアと組み合わせて紹介してきました。BEAMS内のレーベル「fennica」の立ち上げから、2022年にMOGIとして新たなショップをオープンするに至るまで、「デザインとクラフトの橋渡し」をテーマに、国内の産地を回って見出したトラディショナルな民藝・工芸の品々を現代的な暮らしのなかで活用する方法を提案。作り手との交流を通じて、伝統的な技法やモチーフを活かしたオリジナルの別注品も数多く生み出しています。

▶MOGI Folk Art ディレクターのテリー・エリスと北村恵子＊